資料渉猟余話

その145

戦時体制下の「アトリエ」下

～藤本韶三が編んだ美術雑誌～

村澤　聡

戦前の美術雑誌「アトリエ」は、モダンアート風の表紙絵に「ATELIER」の横文字が大きくあしらわれている。ページ数はおおむね60～90。口絵に海外の有名作家の作品が毎回2～3枚ずつ掲載されている。画家のマチスやボナールの作品（印刷写真）は当時、視覚として得られる最新の海外情報だったろう。

昭和13年7月号では彫刻家・マイヨールの作品特集を10ページにわたって掲載。とにかく美術はフランスだが、バウハウスなどドイツの最新の建築情報も載っている。

国内では「宮本三郎と小磯良平」と題された作家論など。考古・文化人類学者の鳥居龍蔵が「インカ帝国とその文化」と題した文化芸術論を展開しているのには喫驚した。

昭和の戦前期は美術にとって黄金時代であり、試練の時代でもあったとされる。そんな中、国内外を問わずジャンルに偏りがないのが総合美術雑誌を標榜する同誌の持ち味だろう。

当時は自由美術や独立美術、春陽会といった国内美術団体の活動が目覚しく、瀧口修造や土方定一といった一流の批評家を抜擢して芸術論や展評にも力を入れている。

目を引いたのは昭和13年4月号の藤田嗣治を囲む座談会。藤田を中心に女流画家協会の三岸節子や藤川栄子ら5人を交えた。中でも戦時体制下での官憲の取り締まりを話題にする場面などは興味深い。

表現対象について「裸体はどうなのか」と藤川が藤田に問うと、藤田は「東京は割合に寛大らしいですね。地方はやかましいかもしれない」と答える。こんな会話からも「自由」に拘泥する当時の美術家らの窮屈な思いが想像できる。

＊

さて肝心の韶三だが、毎号巻末に「卓上メモ」というコラム欄を確保している。編集者であるとともに、美術ジャーナリストの顔。丸々1ページを割き美術エッセー風の文章を寄せている。

韶三の遺した美術評論の仕事を知る資料はほとんどない。この「アトリエ」こそが唯一の証言であり、その意味からも貴重な資料といえる。

昭和13年4月に国家総動員法が公布される。論調に息苦しさを感じる場面もあるが、一方で芸術に理想を求める作家や批評家の激情もにじむ。そんな時代の空気を読み取る韶三は、持ち前の審美眼と絶妙なバランス感覚でその時局を乗り切ろうとする。

同年4月号のコラムに、韶三はこんな文章を寄せている。

〈偏狭な日本主義は封建時代に逆行するだけのことだ。外国文化を排斥しては、日本文化の進展も望めない、充分受け入れてその上に出る事である〉。リベラリストとしての韶三の気骨だ。

＊

歴史教育から私たちが知る戦時体制下の空気や表現者らの内界は、実際にはどんなものだったのか。古い美術雑誌からそのことが読み取れる。当地のどこかの蔵の中に「アトリエ」の欠損号が眠っているなら、ぜひ地域資料センターへ寄せていただきたい。

藤本韶三（左）と四八＝戦後は三彩社を創立、雑誌「三彩」や「古美術」の発行を続ける。弟・四八と組んだ写真集も刊行。多くの画家や評論家らと交遊し、自らも評論活動を行う